

地方空港が“自分ごと”で挑んだAIオンデマンドバス

日本有数の観光地である南紀白浜——。その空からの玄関口である南紀白浜空港の運営会社は、慢性的に不足している地域内の移動手段の拡充を目指し、AIで運行ルートをも最適化するオンデマンドバスの実証に自ら乗り出した。実証期間中の利用者総数は2000名を突破し、地域内の回遊活動の促進に貢献。運賃や協賛金の工夫などにより、事業の持続可能性の観点においてもオンデマンドバスの可能性を示すことに成功した。

ここがPOINT!

導入活用目的

AIオンデマンドバスを活用した
地域の交通課題の解消

テクノロジー

AIによる運行ルート最適化、
タブレット

「コロナ禍が終わり、観光客は戻りましたが、圧倒的に不足しているのが空港や駅からの2次交通です」。地域が抱える課題をこう吐露するのは、南紀白浜空港を運営する南紀白浜エアポートの池田直隆氏だ。

ビーチリゾートに温泉、テーマパーク、熊野古道など、多くの観光スポットと名所を有する和歌山県・南紀白浜。羽田空港から飛行時間約50分の「東京から最も近い関西」（池田氏）でもある。2021年に日本初の民間ロケット射場が県内に開設してからはビジネス目的の来訪者も増加している。

ただ、地域内の移動手段は先細る。「コロナを機に多くの運転手が退職し、タクシーは慢性的に不足してい

ます。かといって路線バスを新規運行するほどの需要はありません」と池田氏。そこで取り組んだのがオンデマンドバスの実証だ。

そのユニークな点は「空港主導」であることだ。南紀白浜エアポートが事業主体となり、JR西日本や自治体、地元のタクシー会社やバス会社等と協力しながら、スピード感を持って実現にこぎつけた。検討の本格開始は2023年夏。その約半年後の2024年1月に実証がスタートした。

プロジェクト収益は黒字に

システムは、他地域で実績あるものを選んだ。リアルタイム性を重視して予約は15分前まで可能。予約が入るとAIがその都度、最適経路を再抽出してバス運転手のタブレットに表示する。予約はWebサイトからのみとし、アプリのダウンロードや電話対応を不要にした。

関係者間の合意形成をスムーズにするため、工夫した点の1つがバス停を設置する施設からの協賛金だ。ス



南紀白浜エアポート
オペレーションユニット長 池田直隆氏

テークホルダーが過度に増加することで、バス停設置場所を巡る意見の分散や、それに伴う運行の複雑化が生じることを回避するため、協賛金額を1口10万円と比較的高めに設定。その結果、9事業者から協賛を得るに至った。

運賃も工夫した。特定ルート内を予約に応じて運行するオンデマンドバスは「タクシー以上バス以下」とよく表現されるが、運賃はバス並みが多い。しかし、持続可能性を考慮し、運賃も「タクシー以上バス以下」の大人680円、小人340円に設定した。

実証は2024年1月10日～2月29日と2024年10月1日～2025年2月25日の2回実施した。1回目は定員オーバーで予約できないケースも頻発し、2回目は夕方のバスを2台体制に強化。2回の利用者総数は2000名を超え、補助金も含めると収益は黒字化し、一定の事業性を実証できた。利用者からも「バスやタクシーが少ない中で計画的に移動でき安心」「観光やイベント参加の幅が広がった」と評価され、「2次交通の重要性をみんなに理解してもらえました」と池田氏は手応えを感じている。

図 空港に停車中のオンデマンドバスと予約画面

